

優秀賞



夢は逃げない

新潟県上越市立三和中学校

三年 高嶋 菜 巳

「夢は逃げない。自分が夢から逃げるだけ。」

これは、新潟県出身の理容師、田中トシオさんという方の言葉だ。国語の時間、心に残る言葉という学習を行ったとき、私はその言葉を選んだ。最初に触れたのはいつだったか、どこだったのかは覚えていない。ただ、なぜか心の中に残っていた。

その言葉を深く実感させられる機会と出会った。それが「演劇発表」であった。正直言って、自分が演劇をするとは考えてもみなかった。「三年生全員で演劇を創る」と聞かされたときも、「面倒くさい！」という言葉が、頭の中をぐるぐる回っていた。それなのに、いつの間にか私は役者の一人となっていた。「なぜ演劇をするのか。それが分からない限り、絶対に行動には移せない。」

私は、発起人の田口先生に直談判することにした。少々気色ばんでいただろう私に、先生はこうおっしゃった。

「この三和区の昔からの財産である谷内池。その歴史や価値を学び、後世に伝えるためだ。どうやったろうまく伝えられるかを考え、演劇という形にしようと思いついたんだよ。」

谷内池とは、三和中学校の裏にある自然環境保全

地域に指定された池。オニバスをはじめとして、貴重な動植物の宝庫とされている。三和区で生まれ育った私だが、そのくらいの知識しかもっていないかった。先生の言葉を聞き、改めて窓の外の谷内池を眺めてみた。雪が降っていたこともあるが、谷内池の姿がとても寒々しく、弱々しく見えた気がした。「このままでは谷内池が死に絶えてしまうのではないか。」

と心配になった。頑張って谷内池の価値や魅力を伝え、守ってほしいという思いが、私の中で強くなってきた。

演劇の練習が始まった。最初は何をすればいいのか心配でたまらなかった。そんな中、ダンスもするのだと告げられた。

「ダンスもするの？ 絶対いやだ！」

と、思わず口にしてしまった。また、演劇だから、当然セリフがある。メインキャストの一人になった私には、かなりの出番があった。セリフの数もそうだが、一つ一つのセリフが恥ずかしくて、口にするのが辛かった。もうやめたい。都合が悪いと言って練習を休もうかな。そんな気持ちになることもあった。

しかし、周囲を見ると、みんな一生懸命踊り、声を張り上げている。中途半端にやるから恥ずかしいんだ。今さら逃げられないのだから、思い切ってやってみるか。そう開き直すことにした。

ある日、自分たちの練習の様子をビデオで撮影した。再生しながらみんなで批評し合った。「私の声、全然響いていない。もっとハキハキ喋らなくては。身振り手振りを大きくしなくては。」

本当に嫌だった演劇なのに、いつの間にかそんなことを考えるようになった自分に驚いた。

そして迎えた本番の日。四カ月間の練習の成果を出し切れるよう、三年生全員で円陣を組んだ。

「みんな、頑張るぞー！」
力強い声だった。緊張が少しずつ和らぎ、勇気がわいてくるのを感じた。

公演は昼と夜の二回行われた。昼は生徒向け、夜は一般公開だ。当然、一般公開の方が緊張した。夜ということもあり、練習のとき以上にスポットライトが眩しく、熱く感じられた。しかし、不思議と観客の方一人一人の顔がよく見えた。私たちの演技を観て笑ったり、涙ぐんだりしてくれている様子を見ていると、とてもうれしく、誇らしい気持ちになった。

「谷内池ラブソング、おしまい！」

幕が下りるとき、仲間たちも笑顔になっていた。仲間と一緒に、何かを一生懸命やって笑顔になれる。そんな経験はめったにできるものではない。この笑顔はとても貴重なものなのだ。下りてくる幕を見ながら、私はそんなことを考えていた。

私は今回の演劇を通して、最初から完璧なものなどないこと、本気で創り上げたものは、完璧ではなくても最高ののだということを実感した。そして、それは他の人の心も動かすことができるのだ。

これからの私の人生、いろいろなことがあるだろう。将来に向けて、やりたくないことに取り組まなければならぬこともあるだろう。そんなときは、今回の経験を胸に、逃げることなく夢を追いかけていきたいと思う。自分が逃げなければ、夢もまた逃げないのだから。